

## 潤いのある都会の生活

僕が学生として、研究者として過ごした場所は、京都、白浜（和歌山）、ホノルル、奈良、香港と観光地ばかりだった。観光地の素晴らしさは、その地に住んではじめてわかると思う。特に、大学院生として過ごした白浜とホノルルには、素晴らしい海があり、研究室やアパートからビーチが見え、歩けば潮風が頬に当たった。こんなところで過ごせるのが幸せだった。

30才半ばに遅まきながら会社人となり、はじめて「普通」の町で過ごした。そして、40才半ばを過ぎて今度ははじめての関東住まい。満員電車にすし詰めになっての通勤を、僕ははじめて経験した。都会の人は大変だあ、としみじみ思った。

東京と同じ大都会のニューヨークでは、お昼にメトロポリタンミュージアムで昼食をとり散策する「近所」のサラリーマンを見かけた。パリでも、数百年の歴史の名残の中で、普通の市民が生活し仕事していた。

確かに東京は想像以上に緑が多く、歴史的な名所もある。でも、この通勤地獄と余りにも近代的なビルと人ごみの中で、毎日の生活に潤いを見いだすことが難しい気がしていた。

そんなある日のお昼、僕は大学のそばの天王洲アイルのピアホールから高浜運河を見ていた。空は曇り、お世辞にもきれいとは思えない運河は、何とも泥の匂いがする。

「潤い」ったら、あるのになあ。こんなに水辺が近いのだから。

近所のサラリーマンやOLが、三々五々お昼を食べている。側道は整備され、これはこれで都会の風景かな。

小さなグラウンドでは少年野球の真っ最中。

水の拡がり子供らの歓声は心を和ませてくれるんだなあ。美しい水とは言えないけれど。



その時何かがひらめいた。10数年の「普通」の町の生活で忘れかけていた感覚が沸き起こった。

仕事だからつらいのは当たり前か。都会だから住みづらくって当然か。体を動かすにはジムに通い、海といえば大渋滞に巻き込まれ。それが当然なのか。

みんながみんなハワイで仕事を出来るわけではない。でも、都会人だって心和

む空間で、毎日生活して悪いわけがないじゃないか。

ああ、この水がきれいになってここにイルカがいたら。クリスマス島での海洋調査に、毎日僕らを出迎えたような、群をなし遊ぶイルカがいたらどんな素晴らしいだろう。そここのオフィスの窓から、ヒョイと頭をもたげたら、そこには楽しげに泳ぐイルカの群れがいる。

子供らの歓声が聞こえるようだ。

きれいな水辺とイルカのいる生活。

メトロポリタンで見た光景は、歴史に名を成す芸術品の数々に毎日触れることなんて出来ないと考えている僕からは、ああこんな都会人の生活もあるのだと思わせるものだった。研究室からいつも眺めたダイヤモンドヘッドの緑は、青の空に映えて心豊かな光景だった。



目の前に博多湾を有し、その名もキャナルシティなる運河をテーマにした街づくりをする福岡のまち。同じ県内の柳川市を見れば、水環境をきれいにするには、単に飲み水や防災上のメリットだけではなく、街に住む人の心に潤い（だけではなく、多くの観光客も！）をもたらすことがわかるだろう。

一方で、水環境をきれいにすると言っても、どれだけきれいにしたらいいのか、そうしたらどういう効果があるのかが見えにくく、特に不況時の今、そんな何の役に立つかわからない公共工事をするくらいなら、橋か道路でも作る方が便利だ、と言われてしまうかも知れない。

しかし、多摩川にひょっこり現れたアザラシのタマちゃん。都会の中の非日常的な光景が、あれほどの人々の心を捉えたことを考えれば、街にイルカの住まう姿の素晴らしさが想像できるだろう。どれだけきれいにする？それは、イルカが泳ぐような、と思えばいい。数十頭のイルカの一頭ずつに街のみんながサポーターとなり、名を付け、餌をやる。

ディズニーシーは、人工の造形とアミューズメントで多くの人を惹きつけているが、人が住み、人が働く都会の水辺に、生き物に歓声を上げる人たちがいてこそ、町には文字通り潤いが生じる。

福岡、大阪、東京と、日本の大都会にはみな水環境が身近にある。都会にイルカが溶け込んで、これを応援し楽しむ人達が集う姿を見たいと思う。

そんな町で仕事をし、生活してみたいと思う。了